



TITLE:

聞きなしの成立

AUTHOR(S):

小林, 博行

---

CITATION:

小林, 博行. 聞きなしの成立. 人文學報 2000, 83: 185-193

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48537>

RIGHT:

## 聞きなしの成立

小 林 博 行

- 1 聞きなしと翻訳
- 2 聞きなしの世界
- 3 鳥は人語を発するか
- 4 万物の声

### 1 聞きなしと翻訳

人は、特定の鳥のきまった声を、意味のある言葉として聞きとることがある。たとえば手もとの野鳥図鑑、『山溪フィールドブックス4野鳥』は、鳥の声をつぎのように記載している。

繁殖期に雄は「特許許可局」などと聞きなされる大きな声で鳴く。(ホトトギス)

声は「仏法僧」と聞きなされ、姿のブッポウソウと混同されていた。(コノハズク)

さえずりは「銭取り銭取り」と聞きなされ、盛夏まで聞くことができる。(メボソムシクイ)

一筆啓上仕候とさえずり、地鳴きはチチッと2～3声ずつ鳴く。(ホオジロ)<sup>(1)</sup>

意味をもつものとして聞かれたこれらの声は、現在、聞きなしと呼ばれる。同書の序文「野鳥に親しむために」にはつぎのような一文がある。「ウグイスのさえずりを『法、法華経』と、いうように、言葉に置き換える聞きなしも役に立つが、自分で工夫して新しい聞きなしを作るのも楽しい」<sup>(2)</sup>。

鳥の声に関して、聞きなしという言葉が多用されるのは、近代、大正以降のようである。大正10年(1921)に刊行された川口孫治郎『飛驒の鳥』には、「聞做」という言葉が散見する。たとえば「フクロウの名と声」と題する一節。

フクロウといふ名は何に由来したのであらうか。大方之も啼声から出たのであらう。紀伊では、フルツクが通り名になつてゐて、其得意の啼声を、

フルウ、ツクノコ、糊を磨りおけ、明日は<sup>あす</sup>日<sup>ひ</sup>和<sup>より</sup>、

と聞做してゐる。飛驒では大野郡でも吉城郡でも、

糊つけ、ホーセー、ホホ、

と啼くといふ。

(中略)

其後集ったフクロウの異名及び啼声の聞做に、左の如きものがある。

コーゾー。此異名を諺語大辞典などは、筑前方言、と記してゐるが、筑前のみではない。九州に広く渡つてゐるやうである。例へば、

コーゾー、ゴロクト、ホーセー、(豊前田川地方)

コーゾー、カレクソクヘ、(肥後熊本附近)

ドーコー、カネツケ、ドーコー、(肥前多良地方)

ドーコーを又ドーボーといふといふ。コーゾーと系統を同うしてゐる。転じて、伊勢津附近では、

ホーッホー、ゴロスケ、ドウシタ、オサヨハママナカ、

と聞做してゐる。因にいふ、オサヨは彼地に於ける昔の佳人、俚謡にも少からず残れるものである<sup>(3)</sup>。

「聞做」という言葉を使いはじめたのは川口孫治郎だったという証言がある。動物生態学者の川村多実二はいふ。

川口孫治郎君は「飛驒の鳥」「続飛驒の鳥」を初め、多数の論著中に本邦各地で蒐集せられたものを紹介して居られるが、同君は之に「聞き做し」といふ名称を与へられて居る<sup>(4)</sup>。しかし、川口孫治郎は聞きなしについて、べつの言葉も使っていた。『続飛驒の鳥』で、「ホゝジロの啼声の翻訳」というのは聞きなしのことである。「雄の啼声の翻訳の数例を上げてみる」と、

一、一筆啓上仕候、チキチン。私の郷里などで斯う聞こゆるといふ。併し此翻訳は近畿を中心として東国へも余程広く行互つてゐたとみえて、江戸あたりでも、彼の異名に「川文章」といふのがあつたらしい。

二、チッベ死んで四十九日。と啼くともいふ。チッベは嬰兒の方言、不幸な親が之が為に彼の啼声を癪にさへるといふ。

三、取つて五粒二朱負けた。之は横浜在に現存するものださう<sup>ママ</sup>なが、時代つきの訳であらう。或は賭博に係した聞做ではあるまいか。乗鞍登山の途中、第二合目で、あれを何と鳴くといふか、との問に対して、案内者なる丹生川村岩井谷の人の答にも、取つて五粒、といふといふ。其下半分は飛驒山脈の西麓に入るまでに何処かで脱落したとみゆる。この聞做も亦古く且つ広く流行してゐたらしいことが推し量らるゝ。

四、弁慶皿もて来い、汁すはしつゆ。熊本市附近では、斯う聞做してゐる。

五、丁稚賓附何時つけた。之は飛驒で最も普通に呼做されてゐるものである。之が本統となつて分派が出来てゐる。

去年の三月つけました。吉城郡では此返答に訳したのもも併び行はれてゐる。

何時もつけんが今日つけた。之は美濃郡上郡高鷺附近に行はるゝものである<sup>(5)</sup>。

「聞做」と「翻訳」が、たがいに区別されていないことは明らかであろう。

聞きなしを翻訳と称するのは川口ひとりではない。川村多実二が昭和9年（1934）に行った「日本学術協会総会に於ける通俗講演の要旨」が、内田清之助『鳥』に収録されている。講演の最後に川村は、鳥の鳴き声を記録する方法についてのべた。川村は6つの方法をあげているが、そのひとつ「章句仮充法」は聞きなしのことである。

(5)章句仮充法一意味のある短い章句を充てゝ模す方法で、鷺の「法法華経」頬白の「一筆啓上仕候」の如く昔から俗間で作られたものに、頗る適切なものがある。他の数例を示すと

燕「土喰うて虫喰うて渋い」

雲雀「一升貸して二斗取る、利取る利取る」,「日一步, 日一步, 月二朱」。

大葦切「ケケン, ケケン親の乳チュウチュウ」。

三光鳥「四十七里ポイポイ, 七里ポイポイポイ」。

梟「糊つけ干せ」,「檻樓着て奉公」。

ルリビタキ「家一寸見に来て呉れ」,「一寸見に来て呉れ, 来て呉れ」。

此最後のものは私の仮訳で、前のが北海道大雪山、後のが木曾駒岳で聴くルリビタキの声である。

此方法は欧米でも採用せられて居り、例へば英国でカウライウグヒス（黄鳥）のをWho are you? 米国でWood Peweeといふ小鳥のをNow you see, now you did it, you did it 又ヨタカに近い一種でWhip poor will, whip poor will 独逸で四十雀のをSpitz die Scharrとしてゐる。

此方法は決して非常に精確に模し得るものには無いが、音色も抑揚長短も同時に覚えられ、一度で記憶に止め得るから、初学の人に向つては大に便利であり、私も屢之を他人に推奨する。従て未だ出来てゐない鳥に就ては成るべく適当なものを作り度いと考へて居る。尚ほ地方民間に流布するもので、なかなかよく出来たものがあるから、努めて、之を蒐集してゐる<sup>(6)</sup>。

ちなみにこのほかの記録方法には、(1)仮名字綴法、(2)羅馬字綴法、(3)音譜法、(4)擬音法、そして(6)蓄音法があるという。(1)(2)と(6)は説明の必要はあるまい。(3)は、(1)(2)では不明な高低長短を楽譜によって補うもの。(4)は、「或材料をすり合せるとか、叩くとか、口笛又は多少の補助物を口に含みて鳴らすとかの音で模す方法」である<sup>(7)</sup>。

聞きなしは、ときに翻訳といわれ、またときには自作のそれが仮訳と称されることもあった。鳥の声を聞きなす人は、翻訳家や通訳同様、ある言語的な能力をもつということだろうか。小

論では、聞きなしの背後にある考え方とその成立をさぐってみたい。

## 2 聞きなしの世界

聞きなしは、さがそうと思えばかなり古くまでさかのぼることができる。日本における聞きなしをあつめ、その変遷を追った山口仲美は、『万葉集』のつぎの歌をあげている。「鴉からすとふ大おほ軽をそどり率まさ鳥での 眞実まことにも 来きまさぬ君を 兎うさぎろ来とそ鳴く」。「カラスという大あわてものの鳥が、本当にはおいでにならない君を、『君がおいでになる』と鳴くことよ」という意のこの歌は、鳥の声を「兎ろ来」と聞きなしたところに妙味があると山口はいう<sup>(8)</sup>。

一方、聞きなしは、言語や地域を越えたひろがりをもっている。『和漢三才図会』からひとつ引いてみよう。ねえ鵲ひょうういについていう。「声は休戯と曰ふが如し」<sup>(9)</sup>。休戯は中国語の感嘆詞で、「くそっ」というほどの意味であること、私は共同研究「言語力の諸相についての試行的研究」で金文京氏に教わった。もっとも寺島良安がそのことを知っていたかどうかは判然としない。

この例は、聞きなしが日本語の独占物でなかったことを示している。事実、中国の本にも聞きなしは見つかる<sup>(10)</sup>。たとえば寒号虫という鳥について、『本草綱目』巻48にいう。「夏月、毛は五色にいろど染られ、自ら鳴いて『鳳凰不如我』と曰うが若し。冬に至り、毛落ちて鳥の雛の如し。寒を忍んで号して曰わく、『得過且過』と」。

ほかの地域にも聞きなしはある。中央アフリカ、ザイールの森から、楽しい例を紹介してみよう。黒田末寿『ピグミーチンパンジー』の一節。「ブッポーソーそっくりの鳴き声がするが、姿は見えない。ボンゴーチョーというこの鳥は、森を行く人びとに『ボンゴーチョーお行かい』と挨拶しているのだそうだ」<sup>(11)</sup>。

ヨーロッパにおいては、川田順造『聲』に引く諸例がおもしろい。たとえばフランス語で雲雀が上昇するとき、*Prie Dieu! Prie Dieu! Prie Dieu!*（神さまに祈りなよ！神さまに祈りなよ！神さまに祈りなよ！）。おなじく降りるときには、*Aux cinq cents diab's, q'j'étais-t-y haute!*（畜生め、高くていい気分だったぜ！）。これらは社会学者のロベール・エルツが、第一次大戦の前線で、仲間の兵士たちから採集したものだという。

ドイツ語でなら、グリム兄弟の採録した昔話のうち、「鳥たちが王を選ぼうとする話『ミッサザイ』（グリム、171）などは、ほとんど鳥の声や物音の聞き做しでできている」と川田はいう<sup>(12)</sup>。

また、キース・トマス『人間と自然界』は英語の聞きなしを紹介している。それによれば、田舎の人々の耳には、野鳥の歌がしばしば人語のように聞えたらしい。ヤマガラは「お座り（sit ye down）」とさえずり、ウズラは「一杯おくれ、一杯おくれ（wet my lips! wet my lips!）」と鳴き、ズアオアトリは「地代を払え（pay your rent）」と歌った<sup>(13)</sup>。

### 3 鳥は人語を発するか

キース・トマスが、「ヤマガラは『お座り (sit ye down)』とさえず」ったと表現しているのはおもしろい。鳥の声が人語に聞きなされるというより、鳥が人語を発するという書きかたである。

鳥が人語を発するという観念は、日本の田舎の人々にもあったかもしれない。たとえば柳田国男『遠野物語』はこんな話をのせる。

山には様々の鳥住めど、最も寂しき声の鳥はオット鳥なり。夏の夜中に啼く。(中略) 昔ある長者の娘あり。又ある長者の男の子と親しみ、山に行きて遊びしに、男見えなくなりたり。夕暮になり夜になるまで探しあるきしが、之を見つくることを得ずして、終に此鳥になりたりと云ふ。オットーン、オットーンと云ふは夫のことなり。末の方かすれてあはれる鳴声なり<sup>(14)</sup>。

柳田の『野鳥雑記』には、日本における聞きなしがたくさん紹介されている。おもしろいのは、この著作が聞きなしという言葉をつかわないことである。柳田は、「自分などの小さい頃には、雲雀は、／テンマデノボラウ、テンマデノボラウ／と啼くものと思つて居た」とのべている<sup>(15)</sup>。

イギリスには、鳥が人語を発するという観念に、異をとなえる人々もいたらしい。キース・トマスによれば、一七世紀のはじめには、「イソップ寓話に出てくるように鳥や獣が口をきけるなどと考える連中は法的に愚か者として処置すべきだと主張する法律家がいたし、また、一八世紀にも教養ある著述家たちは、動物が人間のようにふるまう擬人的な物語にしないで反対の態度」をとったという<sup>(16)</sup>。かれらには、聞きなしもまた反対すべきものだったかもしれない。

日本の教養ある著述家たちは、聞きなしについてどう考えてきただろうか。鳥が人語を発するという観念は、田舎の人々だけのものではなかっただろう。いま注目してみたいのは、『古今集』仮名序とその注釈である。仮名序には冒頭近く、よく知られたこんな一文がある。「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いずれか、歌を詠まざりける」<sup>(17)</sup>。

平安末の顕昭『古今集註』は、これを解釈するにあたって聞きなしをもちだす。「たとへば鶯のひとくゝゝゝ、郭公くつてたばらん、蝉うつくしよし、<sup>きりぎりす</sup>蚕つゞりさせ、此唱等自然に相准心動言形之義歟」<sup>(18)</sup>。鶯の「ひとく」を「人来」と解し、人が来るという意味でもちいた歌が『古今集』にあること、またこの聞きなしが江戸時代にいたるまで継承されたことは、山口仲美がのべている<sup>(19)</sup>。郭公、蝉、蚕の声も、それぞれ聞きなしにちがいない。「心動言形」は、『毛詩』関雎の序、いわゆる「詩序」にいう「情、中に動きて、言に<sup>あら</sup>形わる」(情動於中、而形於言)をふまえるか。

鎌倉末以降になったとされる毘沙門堂本『古今集註』は、仮名序の注におもしろい話を引用

している。鶯や蛙が和歌を発したというのである。『日本記』なる書を引いていう。

大和国に、ある僧、ふかく思ふ弟子あり。後、弟子死て、後三年をへて、彼師の家の前に、鶯来てなく。声をきけは、初陽毎朝来、不相還本誓となきけり。怪て声を摸てかきて見れば

はつ春のあしたことにはきたれともあひかへらさるもとのちかひを

と云歌也。怪思てねたる夜の夢に告て云、我は汝か弟子なり。生てかへて、鳥と成て此に來れりと云けり。

蛙の場合は、砂浜に残った足跡がよくみれば和歌であったという<sup>(20)</sup>。この話、もちろん記紀には見あたらず、かえて御伽草子『火おけのさうし』に登場する。ここでは鶯の声は、「しよやうまひてうらい ふさうけんほんせい」と記され、和歌は下句が、「あはてぞかへるもとのすみかに」となっている<sup>(21)</sup>。

この鶯は、和歌そのままを発したのではなかった。鶯の声と和歌のあいだに「初陽毎朝来」が介在するのは、これが鳴き声を聞きとったものであることを暗示しよう。五字句を重ねるその形式は、漢詩のそれを想起させる。日本語よりも中国語の音、あるいは日本語でも訓より音のほうが、鶯の声に近いと考えられたのかもしれない。

\*

鶯や蛙が和歌を発したという話は、江戸時代の末までは継承されていた。平田篤胤によれば、「近所に道学とか何とかいって、人に物を教ふると云ふ人があるから」行って聞いてみると、「古今集の序を引出して、鶯や蛙がやっぱり人間と同じやうに、三十一字の歌を詠む事に解て」いたという<sup>(22)</sup>。嘉永2年(1849)に再版された『大日本永代節用無尽蔵』には、鶯、蛙の歌にくわえて、関寺のほとりの牛が「よたれもて書ける」歌、下野国で鶯<sup>おしどり</sup>の雌が、雄を撃ち殺した人の夢で「恨てよめる」歌、無言の行をしながらまどろんでしまった僧の耳もとで、蚊の「うなりつゝよめる」歌、橘寺講堂の柱に西方から蝶がやってきて、「柱へくひ入て」記した歌を、それぞれ絵入りでのせている。ここでは鶯の歌に、僧と弟子の話はなく、「初陽毎朝来」も「しよやうまひてうらい」もなく、鶯は「火おけのさうし」におけるとおなじ和歌を、そのままさえずったことになっている。

江戸時代の国学者は、これらの話を好ましからず感じたようだ。「鶯蛙のよめる哥なといふ事は用へからず」というのは契沖である<sup>(23)</sup>。本居宣長はその理由をこう説明する。「鶯蛙の歌とて、卅一字の歌を伝へたるは、古今の序の詞によりて、好事の者の作りたる也。禽獸はいかゞか人の歌をよむ事あらん」<sup>(24)</sup>。近所の「人に物を教ふると云ふ人」に対して、篤胤もおなじことをのべている。

しかし、これらの人々は、鶯や蛙に歌があることまでは否定しない。仮名序について契沖は、

「人のみに限らず、禽獸に至るまで声あるものはおのゝそれらか哥なりといふ心也」という。宣長は禽獸の声すべてを歌とはせずに、「鶯は鶯、蛙は蛙、をのがじゝ鳴声の、あやあるを、それが歌とはいふ也」とする<sup>(25)</sup>。「あやある」歌の一例を聞きなしに見いだすのは、幕末の歌人、大隈言道である。「鶯のささば鳴きは平語、ほけきやうと音になくは歌ならむ。諸鳥皆しかり」<sup>(26)</sup>。「ささば鳴き」は笹葉鳴、また笹鳴ともいい、冬に鶯の鳴き声がまだ調わず、舌鼓を打つように鳴くこと。

かれらにとって、聞きなしは強いて反対すべきものではなかったにちがいない。宣長においては、禽獸は三十一文字を詠むことはないけれども、それでも鶯や蛙の「あやある」声は、人間の歌とおなじ位置をしめるものだった。これになぞらえていうなら、鳥は人語を話さないけれども、その「あやある」声を人語としてとらえるところに、聞きなしは成り立つことになる。宣長の門人でもあった鈴木腹はいう。「鳥獸虫の<sup>あきう</sup>声と人のとは隔ある故に、種々に聞なさるべし。されば鳴声は一つなれど、うつす所には、古今、戎夏、雅俗の不同ある也」<sup>(27)</sup>。

鈴木腹の関心は、古今と雅俗における写しかたのちがいにあったようだ。たとえば鶯の声は、かつては「うゝうくひ」と写されたという。

今俗『ほおほけきよ』と云をは、『うゝうくひ』ともきけば聞ゆる也。『す』といひ『し』と云は鳥にも虫にも多し。然るを古歌に、うくひずとのみ鳥のなくらんとよめるは、其名に因て『す』もじをも共になく声にきゝなしたるなり<sup>(28)</sup>。

ここにいう「聞なさる」、また「きゝなしたる」は、声を言葉で「うつす」こと一般をさしている。現在の意味での聞きなしはその特殊例、意味のある言葉で写したものであるということになるろう。

#### 4 万物の声

聞きなしの例は古くさかのぼることができる。しかしそれを聞きなしとして理解する考え方は、江戸時代の後半に成立したと思われる。のちに聞きなしは翻訳とも称されることになるが、その萌芽がこの時期に兆していることにも注目しておこう。鈴木腹によれば、鳥と人の声にはへだたりがある。そうしたへだたりは、宣長にあっては外国語と自国語のあいだにあった。外国語の音は鳥獸の声とおなじく、「人の正音」ではないと宣長はいう。「外国の引く音、曲る音、<sup>うまる</sup>急促音、『ん』の音、『は』の行の半濁音等は、皆是れ不正の音にして、人の正音に非ず。鳥獸万物の声に類せる者也」。「人の正音」とは、「皇国の五十音の如く単直にして正しき者」。それからはずれた「<sup>からびと</sup>戎狄の言語は、鳥のさへづるが如し」ということになる<sup>(29)</sup>。通じない言語を意味するのに、鳥語、鳥言という言葉は古くからあった。駄舌といえ、<sup>もづ</sup>百舌の鳴き声のようなもの、やかましいだけで意味不明の、野蛮人の言葉をさした。宣長は音韻論をもって、この



伝統を根拠づけようとする。

しかし契沖の見方はこれと異なっていた。契沖においては、鳥獣の声と人の声はかわるところがない。

種々の音声ありといへども、其数五十音に過ず。唯人間のみならず、上は仏神より、下は鬼畜に至るまで、此声を出す。又唯有情のみにあらず。風の木にふれ、水の石に触るゝたぐひの、非情の声までも、これより外に出る事なし<sup>(30)</sup>。

万物の発する音声は、すべて五十音のなかにあると契沖は説く。馬淵和夫によれば、同時代の梵語学者、浄厳におなじ説があり、また五十音といっても、すべての音声がそこに属する以上、日本語や梵語の五十音と考える必要はないという<sup>(31)</sup>。

契沖とよく似た主張は、江戸時代の著述にときおり見いだされる。一例をあげれば、音韻に関して多くの文章を残した安藤昌益はこうのべる。「四十四韻に具ることは、転定の風韻、人の言語声音韻、鳥の鳴韻、獣の吠る、虫の喘ぐ韻、魚の吐く韻、之に通じ、妙感を知る為めの具りなり」<sup>(32)</sup>。昌益のいう転定は天地の意。「獣の吠る」の後には「韻」を脱するかもしれない。昌益の文章はわかりにくい、天地万物の音韻はすべて四十四韻に属する、そのことから人は音韻のはたらきを知ることができる、という意に解されようか。

江戸時代には、鳥が人とおなじ声を発するという見方と、鳥の声は人のそれとへだたっていると見る見方とがあった。後者の見方によると、聞きなしは聞きなしとして成り立つ。一方、前者の見方では、鳥の声を人のそれに写す必要はない。鶯でいえば、「ほおほけきよ」なら「ほおほけきよ」としか鳴かないはずである。ここでは聞きなしは成立しない。聞きなしの例はあっても、それは鳥が実際にそう鳴いているのである。

(1) 浜口哲一ほか『山溪フィールドブックス4野鳥』(山と溪谷社、1991) pp. 240, 244, 318, 340.

(2) 同書p. 6.

(3) 川口孫治郎『飛驒の鳥』(郷土研究社、1921) pp. 77-80.

(4) 川村多実二『鳥の歌の科学』(臼井書房、1947) p. 35.

(5) 川口孫治郎『続飛驒の鳥』(郷土研究社、1922) pp. 7-8.

(6) 内田清之助『鳥』(創元社、1942) pp. 128-129.

(7) 同書p. 127. 川村多実二『鳥の歌の科学』(前掲)も参照。

(8) 山口仲美『ちんちん千鳥のなく声は』(大修館書店、1989) pp. 8-10. 歌は『万葉集』巻14に見える。

(9) 寺島良安『和漢三才図会』巻44(東京美術、1970)上p. 506.

(10) 漢詩には禽言詩というジャンルがあり、聞きなしは唐代には詩歌に取り入れられているという。

聞きなしの成立 (小林)

- 金文京「A little bird told me!—公治長解鳥語考」(慶應義塾大学言語文化研究所紀要22, 1990)を参照。
- (11) 黒田末寿『ビグミーチンパンジー』新版(以文社, 1999) p. 21.
- (12) 川田順造『聲』(ちくま学芸文庫, 1998) pp. 102-105.
- (13) キース・トマス/山内昶監訳『人間と自然界』(法政大学出版局, 1989) p. 186. 英語原文を引用しておく。“The song of wild birds was often interpreted anthropomorphically by country people. The great titmouse said ‘sit ye down’; the quail cried ‘wet my lips! wet my lips!’; and the chaffinch sang ‘pay your rent’.” Keith Thomas, *Man and the Natural World* (London, 1983), p. 127.
- (14) 柳田国男『遠野物語』定本柳田国男集 4 (筑摩書房, 1963) p. 25.
- (15) 柳田国男『野鳥雑記』定本柳田国男集22 (筑摩書房, 1962) p. 93.
- (16) 『人間と自然界』(前掲) pp. 185-186.
- (17) 『古今和歌集』新日本古典文学大系 5 (岩波書店, 1989) p. 4.
- (18) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』補訂版(右文書院, 1981) 上p. 43.
- (19) 『ちんちん千鳥のなく声は』(前掲) pp. 33-36.
- (20) 毘沙門堂本『古今集註』未刊国文古註釈大系 4 (帝国教育会出版部, 1938) p. 5.
- (21) 『火おけのさうし』室町時代物語大成11 (角川書店, 1983) p. 18.
- (22) 平田篤胤『歌道大意』日本歌学大系 9 (風間書房, 1958) p. 9.
- (23) 契沖『古今余材抄』巻1, 契沖全集 8 (岩波書店, 1973) p. 8.
- (24) 本居宣長『石上私淑言』巻1, 本居宣長全集 2 (筑摩書房, 1968) p. 88.
- (25) それぞれ同前。
- (26) 大隈言道『こぞのちり』日本哲学全書11 (第一書房, 1936) p. 223.
- (27) 鈴木胤『雅語音声考』刊年不詳。
- (28) 同前。原文の傍線を『』に改めた。なお「古歌」は、『古今和歌集』巻10「心から花のしづくにそほちつゝ、憂く千ずとのみ鳥のなくらむ」。山口仲美『ちんちん千鳥のなく声は』(前掲) pp. 32-33も参照。
- (29) 本居宣長『漢字三音考』本居宣長全集 5 (筑摩書房, 1970) p. 386.
- (30) 契沖『和字正濫鈔』巻1, 契沖全集10 (岩波書店, 1973) p. 114.
- (31) 馬淵和夫『五十音図の話』(大修館書店, 1993) pp. 37-52.
- (32) 安藤昌益, 稿本『自然真営道』韻鏡巻, 安藤昌益全集18 (農山漁村文化協会, 1982) p. 350.